

林政ジャーナル

No.46

2008年1月31日

日本林政ジャーナリストの会

〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13

三会堂ビル 日本林業協会内

TEL 090-5541-6891

FAX048-771-3554

禁 無 断 転 載

定例研究会2007年7月26日(木)

農林水産省第7共用会議室

市町村合併における 森林行政の変貌と対応

加藤 鐵夫

農林漁業信用基金副理事長、森とむらの会評議員

まとめ：上松 寛茂

森とむらの会(古橋源六郎・会長)は、「市町村合併における森林行政の変貌と対応」と題する調査研究報告書をまとめた。「平成の大合併」が進む中、市町村合併によって森林行政がどう変貌し、今後どう対応していくべきか。都市・農山村・独立型という類型別に区分した静岡県浜松市・岐阜県郡上市・山梨県小菅村の都市と農山村、独立型という3カ所を選び、実態調査を実施した。これは国土緑化推進機構からの委託研究で、調査研究グループの全体のまとめを担当した同会評議員、元林野庁長官で農林漁業信用基金副理事長の加藤鐵夫氏が2007年7月26日(木)、農林水産省第7共用会議室での日本林政ジャーナリストの会定例研究会でその概要を講演した。講演内容は次の通り。

林野庁の森林行政はこれまで国と都道府県が中心。その中で市町村をどう位置づけるかが常に悩みのタネだった。市町村には専門的能力があるのか、実際に行政をやれる基盤は出来ているのか。そういう観点で考えれば今度の市町村合併でそうした基盤はますます失われる可能性がある。一方で、今回調査した浜松市などは課制度を作り森林行政をきちんと進めていこうという意識で市町村合併に臨むところもある。形骸化の恐れもあるが、新しい試みをしているところもあり、

実態を見てみる必要があるという問題認識で類型別に3カ所の実態調査をした。

静岡県浜松市、岐阜県郡上市、山梨県小菅村を調査

静岡県浜松市は天竜川流域の12市町村が05年に合併。07年に政令指定都市になり、人口80万人を超え、面積は合併後15万 km^2 の大都市ができた。ただ、天竜林業地帯は民有林がほとんど。その民有林の振興が市の大きな課題。

二つ目の調査地は岐阜県郡上市。04年3月に典型的には中小の7つの町村が合併。人口5万人、9割が森林地帯で、民有林が大半の地域だ。

三つ目の調査地は山梨県の小菅村。自立して頑張ろうとしている村で、東京都との境、多摩川の上流にある。隣接した東京都奥多摩町と近い関係にある。人口は1千人を割った小規模山村だ。

全国の地域類型別に見た市町村合併は、99年のベースで3229市町村のうち1963が合併にかかわった。非合併市町村が1266。合併のパターンは、都市的地域が4割、平地、中間、山間部が6~7割で、こちらが主流。1963の市町村が合併後560の市町村になった。06年3月末では1826になっている。

森林行政 高まる市町村の役割

森林行政はこれまで、国と都道府県が主体となってきた。国が全国森林計画を策定、都道府県が作成した地域森林計画を基に造林補助金は国からの補助金と合わせ森林組合などに交付。森林施業技術などを普及させる職員が都道府県に配置され、これまでの市町村は事業の実施主体として位置づけられてきた。一方、山村行政は山村振興法に定められた市町村が重要な役割を果たしてきた。

こうした森林行政が、83年の森林法改正で見直された。いちばん議論になったのは間伐の手遅れ。木材価格の低下にともなう森林生産活動の停滞で放置された森林の荒廃があった。現地の実態に合わせて間伐の施策をとっていく必要に迫られた。要間伐の山が相当量ある市町村に対して、間伐推進計画を作成するよう促す森林整備計画の制度を導入する森林法の改正が行われた。これによって市町村の位置付けが出てきた。

98年には市町村の役割を強化し、民有林がある全市町村に市町村森林整備計画を作成することを義務付ける制度改正が行われた。これにより、都道府県知事が持っていた伐採の届け出の受理など、森林施業に関する権限が市町村長に委嘱された。

01年の森林・林業基本法の制定に併せて行われた森林法改正で、森林の発揮すべき機能に応じて水土保持林、森林と人の共生林、資源の循環利用林に区分されたが、その属地的区分は市町村森林整備計画で実施されることになり、文字通り市町村が主体となって地域の実情に即した森林整備が進められることになった。

森林行政担当職員が減少

しかしながら、市町村には森林の専門家や職員は少なく、実態的に都道府県や森林組合に依存しているのが実情。行政の効率化で職員数は減り、予算も厳しい状況が予想される。

今回調査した浜松市と郡上市は、全体職員数が減少する中で森林行政担当職員も減少しているが、担当職員は旧市町村にも配置され、浜松市は新たに森林課が設置された。旧水窪町で設置されていた水源基金が浜松市森林環境基金に衣替えし、拡充されている。郡上

市では、間伐補助事業に対する市町村の高上げが最も高かった旧村並にし、国、県の補助金と合わせ森林所有者の負担分が5～10%に抑えられている。

だが、旧市町村に置かれた現場との意見交換を行う地域協議会は市が主導し、要望などを述べるだけで、自主的で活発な論議が行われるようにはなっていない。さらに市議会の議員は、旧山村出身者は限られ、森林・林業・山村のことが話題になる機会は減少傾向にある。旧市町村に置かれた出先は住民生活に直結する業務が中心で、森林行政については窓口的。その中で浜松市は本庁森林課に加え、現場に近い天竜区役所に森林整備課を置き、現場業務を持たせることにより職員の能力の向上に努めているが容易ではないようだ。

郡上市では、行政の効率化から旧市町村駐在の職員は09年には本庁に置かれた林務課に集中させる方針といわれる。専門能力の不足では、浜松、郡上の両市とも専門知識を持つ県職員を受け入れ、実務面でもこれまでと同様に森林組合に依存、郡上森林組合は、森林施業計画のための基礎的資料の作成、保安林整備事業などの取りまとめをしている。

合併を機に森林・林業行政を住民全体のものに

今回、事前に浜松市と郡上市の合併前の旧市町村長に対して行ったアンケート調査結果によると、合併のメリットとして期待されるのは、行財政の効率化と財政基盤の強化と答え、デメリットについては、住民の声が届きにくくなることやコミュニティ、地域活動の弱体化、地域の特色を生かした施策の縮減などを挙げている。アンケート全体をみると、現在の市町村の財政や人材などからすれば合併を指向せざるを得ないとしつつも森林・林業の振興、山村地域の活性化についてはさらに弱体化していくことが懸念される。

今回の調査から言えることは三つある。第一に、市町村における森林行政の位置づけをどう確保するかということ。合併により市町村長の森林・林業の問題意識は希薄化し議会での論議の機会もますます減っていくことが危惧される。これにどう対応するかが課題だ。浜松市においては、合併を機会に森林・林業ビジョンを作成。30年後の森林・林業の将来像を示すとともに、全ての地域の共通の取り組みに広げ、市政運営の指針

である市の総合計画などとの連携を図ることにより市政における森林・林業行政を位置づけている。そのやり方として、従来の関係者以外に市民や、企業など幅広い方々の意見を集約する必要がある。そのための検討会の立ち上げや市民インタビュー、ワークショップ、フォーラムの開催、パブリックコメントによる意見聴取などの努力が積み重ねられてきた。

市町村に義務づけられている森林整備計画の多くは、きわめて実務的につくられ、住民全体の意志やビジョンを盛り込みにくいシステムになっているのは問題だ。

市町村単位の「森林管理委員会」の試み

第二の課題は、森林行政としての専門的知識や能力をどう確保していくかだ。郡上市は04年に市町村合併し、その7月には森林組合もまったく地域と同じレベルで広域合併した。市町村合併で、より森林組合への依存度が高まる中、森林組合も集中化を図る流れがきている。浜松市も現段階では積極的な形にはなっていないが、その方向に行くだろう。

森林組合に依存していくことの問題点として、森林組合は定められた実務の処理が中心で、森林行政を主体的に構築していくことは困難だ。どうしたらいいか。その一つの例として、岐阜県が支援している「市町村森林管理委員会」の組織化という新しい動きがある。郡上市での名称は「森づくり森林会議」。

市町村を単位に、抱える課題に的確に対応できるよう森林所有者や森林組合、林業事業者などの関係者だけでなく、地域住民、NPOなどさまざまな人を集めて、地域の課題を掘り起こし、そこで何をしていくかというコンセンサスを得ていく。このために県から派遣された専門アドバイザーの協力を得て、コンセンサスを得ていくという新しい試みを始めている。現在、91年の森林法改正により設置された森林の流域管理システムがあり、流域の幅広い関係者が参加する協議会が設置されている。こちらは都道府県が主体に運営される

のに対し、森林管理委員会は、市町村が責任主体となっている。各市町村が何を求められているのか、何をしなければならないかを整理した位置付けをしっかりとする必要がある。

より広い範囲の人たちとともに

第三の問題として、市民の自主的活動と連携していくこと。より幅の広い人々が森林管理の問題に参加していく形をつくる。その例として、浜松市の旧佐久間町での「がんばらまいか佐久間」というボランティア組織の活動がある。佐久間ダムに関連したカネが入る。それが自主活動の財源に。浜松市も積極的な支援をしている。

もう一つの事例は、小菅村の多摩川源流研究所で、所長は民間人。多摩川や小菅村の歴史と知恵を子どもたちに残したいという調査グループで、源流体験教室や森林ボランティアによる森林再生プロジェクトを進めている。民間に行政が乗った形になっている。

多摩川源流研究所の職員は2人、運営費は年間2千万円、村の規模からはかなりの負担だが、大きな成果を挙げている。山梨県甲州市、小菅村、丹波山村、東京都奥多摩町による多摩川源流協議会が設立されているほか、ホンダ、JT、東京電力など企業と地域が一体となった森づくりが行われている。

合併に伴って市町村の森林行政は、総体として体制をスリム化せざるを得ず、現地対応能力を弱体化、不安定化させている。市町村行政としては、地域における実態把握と課題の掘り起こし、そのための政策の検討、国、都道府県との連携、独自政策立案などが必要であり、それをどのように進めていくか、今回の調査で示された試み等も踏まえつつ今年度さらに調査し、対応の在り方を考える材料の提供と若干の提言ができればと、思っている。

日本林政ジャーナリストの会 第30回定期総会のご案内

▽日時 2月22日(金) 17時30分～20時30分

▽記念講演 滑志田隆氏「地球温暖化問題と森林行政の転換について」

▽場所 東京都千代田区霞が関1-1-1 法曹会館 電話03-3581-2146

大西洋の島に「日本スギ」

講師：高田浩一

前・林政ジャーナリストの会会長

日本にしか生育していないと思っていたスギが、はるか大西洋の離島に、堂々と茂っている。しかも、半端な量ではなく、森林全体の2割前後、人工林（総面積1万2500^{ヘクタール}）に限れば60%にもおよぶ。

導入は100年以上前

話題のところは、ポルトガルの離島「アゾレス諸島」。大西洋のまっただ中にあり、ヨーロッパ本土から西へ1400～1800^{キロメートル}。さらに、ここから西へたどれば約3800^{キロメートル}で北アメリカという地点にある。九つの島からなる火山群島で、古くから、ヨーロッパからアメリカやアジアへ向かう中継地としてにぎわった。北緯35度から39度の間に位置し、周囲の海を暖流のメキシコ湾流に洗われ暖かく亜熱帯性気候である。

日本スギが導入されたのは、100年以上前と言われる。初めは観賞用として植えられたが、成長が速く、まっすぐ天に向かって伸びる従順さ、しかも弾力性があって強風に強いなど現地への適応性が高く、同時にテストされたユーカリやアカシアに比べ優れていたため、大量に植林されることになったという。日本スギは、現地では学名にちなんで「クリプトメリア」と呼ばれる。観光地の景観を濃緑の木立で盛り上げたり、放牧地の防風林となったり、火山灰地の土砂の飛散・崩壊を防いだり、谷川の流路維持に使われたりしている。スギは列状や林になり、あるいは山肌一面を覆う。

風景林や保護林など多方面に活躍

私たちが訪れたのは、この群島の中で最も大きいサン・ミゲル島。東西65^{キロメートル}、南北の最大幅16^{キロメートル}あり、広さは747平方^{キロメートル}。東京都の3分の1、鹿児島県の奄美大島とほぼ同じ大きさ。島の人口は約13万人。主たる産業は、放牧された牛によるチーズなどの乳製品、それにワイン、果物、観光などだ。日本スギは、この島だけで、アゾレス諸島全体の7割を占める。

サン・ミゲル島の中心都市、ポンタ・デルガーダか

ら島内を北西へ約20^{キロメートル}行ったところに、休火山の火口が湖になったセティ・シダーズ湖がある。観光スポットのひとつで、ひょうたん型をした湖は福島県の五色沼のように湖面に緑色と青色の水をたたえ、その周囲に濃緑の日本スギの木立があちこちに点在。緑色の壮大なパノラマの中に、独特の樹形のスギが見られ「こんな遠いところで…」と感激する。湖面は標高251^{メートル}、周りの山を含めた一帯の広さは約500^{ヘクタール}。日本スギはここでは景観を引き立てるのが主な役目。「伐採後、2年内に再植林」と取り決められているという。

ポンタ・デルガーダから逆に東へ15^{キロメートル}ほどのところには、湯煙をあげマグマが吹き出している温泉場のようなカルデイラスという観光地がある。そばに、約50^{ヘクタール}四方の広さのスギ林がある。下枝のない大木が林立し、中にベンチが設けられて、木陰の憩いの場といった趣だ。日本スギが“活躍”しているのはこのほか、放牧地の周りに境界線と防風林を兼ねた木立、火山灰地の土砂の飛散や崩壊を防ぐため山肌全面を覆う森、あるいは水路の斜面に立つ保護林などが随所に見受けられた。島の東部では溶岩の山肌を重機で削り、細かい土粒にして黄緑色のスギの苗を植えているところを見た。砕けた土に肥料をまぜ植栽を進めているという。

内装材としての用途開発も進む

スギは平均伐期30年、樹齢50年になるとほとんど伐採される。それ以上になると、病気になりがちだからという。スギ山に入って見たが、日本の山と同じ。直径50^{センチメートル}以上、高さ約30^{メートル}の大木もあった。行政機関である森林センターの職員に尋ねると「40～50年生」という。わが国のスギよりずっと若齢なのに気づく。年輪の間隔がだいたい日本より2倍ぐらい広い。温暖な気候で成長が速いからだ。

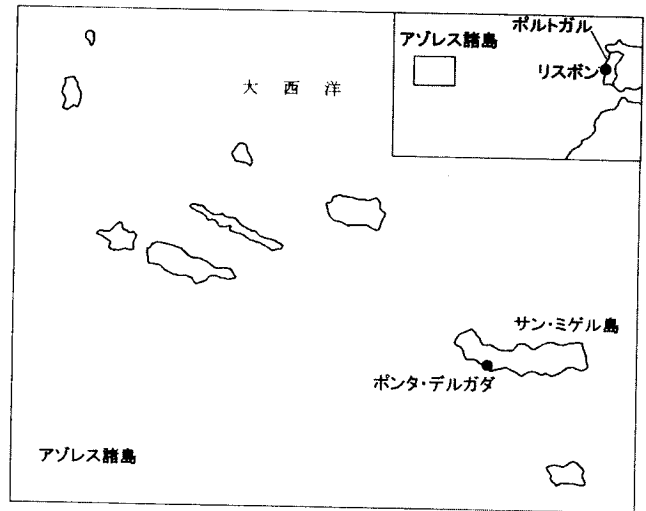
さらに、木材になったスギは、年輪が粗いためか、多くは建設現場での型枠材や窓・ドア、低質家具の材料として使われてきた。しかし、最近は壁板や屋根の内

張など内装材としての用途開発が少し進み高級化の兆しもある。ポント・デルガダで大規模製材工場を経営するジュアン・ブランクさんは「スギは木肌がきれいで、加工しやすい」と、板を磨いてニスで光沢をつけたり、彫りを入れたりして、壁板や天井の内張、柱など内装材の製品開発に躍起。工場内にスギの丸太を輪切りにしていくつも飾り、雰囲気盛り上げる。従業員60~70人と大規模で、過去40年間、ずっとスギ中心の製材という。山でも、数mの高さの若木に枝打ちがしてあるのを見た。約10年前から始まったといい、その目的は「節を減らすこと」と言った。政府の補助金がつく。間伐も行なわれ、3~4mの高さのものはクリスマス・ツリーにされるとか。

産官あげて維持・拡大に取り組む

なぜ、アゾレス諸島でスギが大量に生育しているのが分かったか——。「スギは、日本にだけ生育する固有の樹種である。スギ科スギ属に分類されるが、一属一種と言ってスギ属にはただ一種スギしか含まれない珍しい例」（新建新聞社「杉」）というのが一般的な常識である。しかし、1998年に、ポルトガルのリスボン工科大学農学研究所林学部のマリナ・ヘレナ・アルメイダ教授らが、茨城県にある林野庁林木育種センター（当時）を訪れたことから分かった。アルメイダ教授らは、アゾレスのスギが2代目、3代目になり、風や病気（根朽菌＝ナラタケ菌）に対してやや弱いように見えるので、その対策を求め、スギの“本家”である日本に、やって来たのだった。ほかに木質の向上などの課題もあり、一行はこれまでもう一度、来日し、国内のスギの山を視察している。

私が07年6月にアゾレスの現地に行ったのは、同地で森林・林業関係の研究者らが世界から集まるIUFRO大会が開かれたからである。これに参加するのを名目に日本スギの生育ぶりを視察した。何しろ飛行機を2回乗り継ぎ、計15時間もかかる遠隔の地なので大変だった。しかし、訪れただけのことはあった。まず感心したのは、スギを植林の主力樹種として官学あげて拡大に努めているその態勢だった。アルメイダ教授らの説明によると、スギはその優越性を認識され1934年から単一植栽体制がとられるようになった。その後、木材資源の規制緩和で乱伐され、サン・ミゲル島では森林面積が5%まで低落（1951年）したが、それから15年間で行政当局が



造林に力を入れ倍増させた。その時の主力樹種がスギだった。

今でも、同島にある国直営の苗畑は、毎年、希望する森林所有者にスギの苗木を無料で配布しており、その数は年間140万本にのぼる。一方、製材所で扱う木材の93%がスギ（2004年）という圧倒的な広がりを見せる。

さらに、現在も日本からスギの種を取り寄せてチェックしている。IUFRO大会で報告されたのは、東北、関東、関西、九州各地のスギを諸島内の数カ所に植え、それぞれ林齢4年の段階での調査・分析だった。総じて日本スギは、現地で成長性が良く適応性があるという結果が出ている。

この大会に私は、森林技術協会OBの福井昭一郎さんと一緒に行ったが、日本から他に研究者数人が参加した。その中の一人が言った。「これだけ、まとまっているとやりやすい」と。スギの維持・拡大に官学あげて熱心に取り組む、研究・普及が容易ということだろう。つまり、草創期のたぎる熱意があるのだ。

かえりみて、わが国の現状は——。スギは人工林の面積で44%、蓄積量で約6割を占めるほどの代表樹種である。しかし、最近の林業の停滞、花粉症の問題などで、敬遠気味なのは否定できない。生育に人手を加えるようになって500~600年の歴史がある。アゾレスの日本スギを思うと、火山灰地が多く強風、多雨など共通点のある風土であり、あらためてスギの価値を見直す必要性を痛感する。

2007年9月25日

大西洋上でスギが大事にされている島

アゾレス諸島ーサン・ミゲル島のスギを訪ねて

講師：福井昭一郎

前（社）日本森林技術協会

fukui06@ybb.ne.jp

大航海時代のさきがけとなったポルトガル国による1427年のアゾレス諸島の発見。以来、諸島最大のサン・ミゲル島は、大西洋における重要な補給中継基地として牧場や農地、要塞・町建設などの開拓が進み、18世紀には島の森林は壊滅をみたとのこと。と同時に島は山腹崩壊、牧場等の荒廃を来し、対策としてポルトガル本土や海外からさまざまな樹種が求められて来ましたが、19世紀半ばに鑑賞樹として日本のスギが渡ってから島の様相は変わったといえます。現在の情報化の時代にあって、1世紀半ものあいだ日本のスギがアゾレス諸島に大きく貢献している事実がわが国林業界に伝えられたのは、なんと10年前の1998年のことでした。

今回の視察は、2007年6月にIUFRO森林バイオテクノロジー国際大会がサン・ミゲル島で開催され、日本に2度来日し面識を得ていたアルメイダ教授（ポルトガル・リスボン工科大学）ら3人の研究者も同大会で発表参加するとのことから、念願だったアゾレスのスギ視察が実現しました（高田浩一氏とともに視察）。

〈視察メモ〉

◇現在、サン・ミゲル島（最大長東西70^{km}、南北16^{km}、面積7万6500^{ha}の島。東京都の3分の1の面積。諸島全体の人口は13万人）に、スギ人工林が1万2500^{ha}、アゾレス諸島全体では1万7000^{ha}超が生育している（東京都多摩地域のスギ林面積は2万700^{ha}）。スギ苗の需



要は現在もまだ続いており、年間200万本生産している
(3000本/㍏で換算して年間600㍏の造林面積に相当)。

◇サン・ミゲル島の森林の半分を占めるスギ林は、山腹の保全への貢献、観光名所のカルデラ湖の景観形成・水質の保全、集落の水源を守り、主産業である牧畜業を支えている(スギ林は牧草形成に不可欠な牧場の防風林として信頼されている)。すでに1934年以降にはスギの単一植栽体制が確立されていたとのこと(第二次大戦後にスギ造林が復活し現在の姿に)。現在は、30年代期の林業が営まれ、主に建物内装板材や天井梁組材、コンクリート型枠材等を生産し、アゾレス諸島のほかポルトガル本土で消費されている。

◇現在の課題は、3世代目に入ったスギ林に菌害(根株への腐朽被害)、風等被害が増加しているとのこと。このため母国日本のスギ導入品種の抵抗性等の検証や、渡来したスギが日本のどこの産であるかの遺伝学的ルーツの検証が行われている。

◇島では、スギは“Cryptomeria”または“Sugi”と呼ばれている。スギ花粉症問題は、周囲が海に囲まれているため起きていない(海岸まで6~7㍏の距離)。

◇アゾレス諸島はポ国特別自治区で首都はサン・ミゲル

島のポンタ・デルガダ市。リスボンとは1日3回の便がある(ジェット機で約2時間)。欧州では海洋リゾート地として人気が高く、首都には4つ星・3つ星ホテルがある。

◇詳細報告は、「森林施業研究会」ホームページの「ニュースレターNo.38」をご覧ください。

◇アゾレス諸島には機会をみて再訪もと、高田・前会長とも話しています。ご関心ある方ご連絡ください。

写真① サン・ミゲル島の観光名所・カルデラ湖を囲むスギ林

写真② 牧場が主体の農村風景(大西洋を望む)

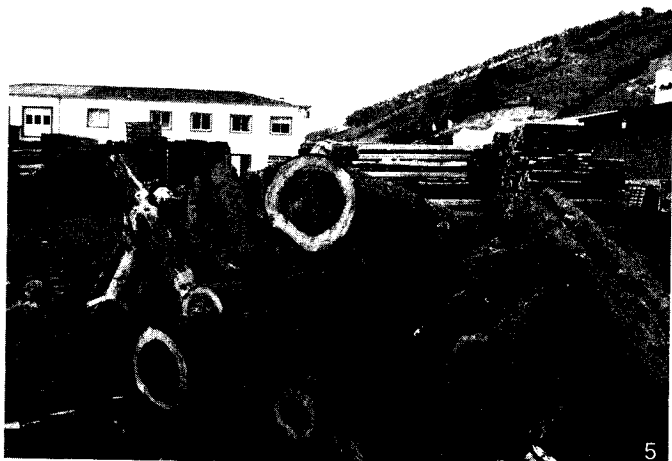
写真③ 島内の各所にスギ林と牧場が出現(手前はスギの伐採地)

写真④ アルメイダ教授(中央)らと再会(彼らは2度来日。日本からのIUFRO大会の参加メンバーとともに)

写真⑤・⑥ 島の製材所で扱う9割がスギ材。工場はフル稼働(オートメ化・内装板材や天井梁組材を生産)

写真⑦・⑧・⑨ 偶然遭遇した「スギの葉ロード」

滞在中の祝日、島の主教会のパレードがこの上を通った。スギが島の慣習にまで取り入れられていることに感動(コース約300㍏。教会近くなると花びらも撒かれている)



村全体が「木の博物館」 ～森と人が出会う岩手県川井村～

水口 哲
環境ジャーナリスト

日本のチベット？

黒のヘリコプターが爆音を立てる。濃緑色の訓練服を着た男が降り立つ。自衛隊の特殊部員だ。3日分の水と食料だけで、これから、1カ月間の長距離単独行の訓練に入る。「日本のチベットと呼ばれる北上高地」とのナレーションが流れる。高倉健主演の角川映画「野性の証明」（1978年）の冒頭のシーンである。撮影の一部は、岩手県川井村で行なわれたという。

荒涼感と神々しさの入り混じった山並み。氷河期の痕跡に、森と人のドラマが交錯する北上高地。その中央部に広がる村。東京23区とほぼ同じ面積の563平方キロに人口が3400人余り。西は盛岡、東は三陸の宮古、南に遠野、北は岩泉に接する。「日本百名山」（深田久弥）の早池峰山（1917年）を含む山林が94%を占める。

この豊富な森林資源を活用して、村全体を「木の博物館」として開館したのが06年。森と、歴史、文化、生活を結びつけ、教育と地域振興に役立てる。役場に隣接する民俗資料館に本館が、屋外に16の分館（サテライト）が設立された。分館は、森のフィールドで、調査結果の説明板や樹木プレート、実験施設などが設置されている。開館期間は4月から11月。観察コースには、有料の「森の案内人」が同行し、学習効果を高める。「特に、小中学生、高校生の環境学習の基地にしたい」と内館勝則村長が語る。

以下、盛岡からの道のりと、二つの分館と本館を紹介したい。ブナなど落葉広葉樹の保水力に驚かされた「水源の森」、戦後農政の失敗と森林再生の苦闘を物語る「治山の森」、森の恵みと生きた昔の暮らしを伝える民俗資料館である。

盛岡から区界へ

午前11時35分。盛岡駅からバスで道の駅、^{くさかい}区界高原に向かう。10分ほどで市街を抜けると、スギ、ミズナラ、カラマツの木立が見える。梢の先には、宮沢賢治の「イーハトーヴォのすきとほった風、夏でも底に冷たさを

もつ青い空」が広がっていた。薪ストーブの煙突をつけた民家も点在する。

区界峠を境に、盛岡市から川井村に入る。標高750m余りの道の駅に着くと12時を回っていた。ここで、博物館の指導案内人、高橋大等さんらの出迎えを受ける。小雨の中、国道106号線を走る。門馬小学校を左に折れて10分。分館3号の「水源の森」（黒沢上流域広葉樹天然林）に着いた。

三つの小流域を設定し、落葉広葉樹林の間伐の程度に差をつけ、保水力、水質などが比較できる。例えば、保水力。流域の出口に設けられた木製の量水堰には逆三角形の堰を通して背後の静水池から水が流れている。三角形なので流れる水の高さを見れば流量が計算できる。「広葉樹林の沢の素晴らしい点は、少々雨がなくても、



流量観測用の量水堰と水位計



雨水捕集器で水量を測る

逆に日照りが続いても、水量が余り変わらないことで」と、高橋さんが言う。

「次にブナ自体の保水力を見ていただきます」。彼が示したのは、樹幹流を測定するため包帯のようにブナに巻きつけられた雨水捕集器だった。捕集器の先には、ホースが水甕とつながっている。水は、ドラム缶にして半分ほど溜まっていた。

林内で樹上を見上げる。ブナの末広がり枝が漏斗のように雨を集める。集まった水は、樹幹から樹下へと木肌の表面を伝わって流れ落ちる。流れは根元に吸い寄せられ、ほとんどが地下にしみ込んでいく。ブナの保水効果の大なるを知る。「保水力だけでなく、水土保全の力があります」と高橋さんが補足する。

次いでカラマツの方を見る。まず、枝が少ない。ブナの樹冠が漏斗なら、こちらは破れ傘。雨はパラパラとまとまりなく地面に落ちる。幹を伝わる雨水も鱗片状の木肌に吸収され、なかなか根までは届かない。「ブナと比べると溜まる水の量は4分の1ぐらいでしょうか」と、役場の中村博文さんが言う。

森林再生の苦闘

翌朝午前10時。大陸からの北西季節風が稜線を吹き抜ける。風速計が唸りを上げて回転する。粉雪が乱舞する。言葉がちぎれる。叫ぶような高橋さんの説明が続く。我々は、害鷹森（1304[㊦]）の西斜面を望む尾根道に立っていた。標高は1200[㊦]余り。南西19[㊦]先にあるはずの早池峰山の山頂は雲と雪に煙っていた。

目の前の斜面は、かつて物資運搬用に南部牛の飼育が盛んだったところである。南部牛に明治以降イギリスから輸入したショートホーン種を交配して生まれたのが日本短角種（アカベコ）である。強健で粗食に耐えるため、放牧に適する。夏は牛を山に上げて半自然草地で放牧し、冬は里で畜舎飼いをする「夏山冬里」の放牧が行われていた。疎林の下にはシバが密生し、広い草原を形成していた。「ノシバを採集しに、盛岡から庭師も来た」（古舘章秀・川井村参事）。

1970年代後半からそれが一変する。「新全国総合開発計画」を受けた「北上山系開発事業」が始まったからだ。東北の一大食糧基地にしようと、半自然の草地や林地の一部が人工草地に置き換えられていった。ジャージー種が導入されるが、酪農は失敗に終わる。酪農と並行して肉用牛生産も行なわれた。原種地の強み

を生かし、日本短角牛の繁殖と肥育に力が注がれた。光が見えたと思うや、ウルグアイラウンド（1991年）で牛肉が自由化される。赤身の短角は米、豪からの牛肉と市場が競合した。「頭を殴られた気分でした」と内館村長が言う。当時は、役場の職員だった。

開発計画は頓挫し、かなりの人工草地は放置された。人の手が入らない農地は脆い。土壌浸食が起こり、流れる土砂は、沢をふさぎ、川を汚した。県と村が対策に乗り出したのは1993年。北上高地の荒廃地の緑化に関しては、多少の蓄積はあった。岩手大学農学部、林業試験場東北支場、国、県が60年代から緑化復旧試験に取り組んできたからだ。これらの試験結果を踏まえ、村井宏・岩手大教授（環境緑化専攻）らと試行錯誤の植生回復が始まった。

草本類や広葉樹が守っていた土地は、植生を失うと、ほどなく石ころだらけの土地になる。この地は、冬季、寒冷と強風、小雪のため地表が凍る。水分が岩石にしみ込み、凍結と融解を繰り返す。岩石の多くは砕かれ風化する。一方、凍結・融解に負けない硬質の石くれは凍結した水分によって、表土に押し上げられる。周水河現象と呼ばれ、森林限界の高山帯で見られる景観である。

まず、肥えた土と草の種子を撒いた。しかし、強風に飛ばされ根づかない。そこで、種子付きの「むしろ」で地面を覆った。芽は出たが、冬を乗り切れなかった。次に防風柵を設置した。柵の陰に吹き溜まる雪が防風、保温の効果を発揮し、萌芽や苗木の生育を守った。草や低木類が根づいてから、カラマツ、シラカンバ、タケカンバを植えた。それらは今6~7[㊦]まで成長した。種が飛んできて自然に生えたイヌコオリヤナギ、ミヤマヤナギも地面にへばりつくように枝を広げている。「施行から10年以上経過して、漸く復元する兆しが見えまし



防風柵が緑化の要



早池峰山を望む

た。多額の費用と労力がかかりました。自然を壊したら大変なことになると、子どもたちに教えたい」。県内の小学校で長年教えてきた高橋さんが言う。

ふと、目と鼻の先にある害鷹森の山頂を見る。ブナの木立が優雅に揺れていた。伐採を免れたブナである。陰性の高いブナは、数百年から千年の時間のなかで次第に優占種となり極相林に移行する。そして表土を作る。陽が差して来た。南西方向を見る。早池峰山が「拳をあげたような突こつとした」(深田久弥)姿を現し始めていた。

森の恵み

かつて村の生活は、山と共にあった。畑作のヒエ、アワに灰汁抜きしたドングリを混ぜて食べた。炭を焼き、蚕、馬、牛を飼った。山の恵みを生かすには、身近な素材を活用した手作りの道具が不可欠だった。衣食住から

生産・生業、信仰、社会生活、商業、芸能まで1万点近い民具が収集され、分野別に展示してある。それが、本館の川井村北上山地民俗資料館である。

数種類ある鋸のうち、前挽鋸だけでも何十点と収集されている。産地や形状を細かく見れば、村外とのつながり、木の利用や村の経済状態の変遷が推測できるはずだ。艶やかな布や糸の数々は、暮らしのなかの華やきを伝える。南部曲家を再現した炉ばたの部屋で眼を閉じた。薪の弾ける音。クマ鍋の香。遠くで斧の乾いた打撃音。伐槌が雪を擦る摩擦音。神楽でのざわめき。一瞬、100年前の光景を聴いた。

環境教育への道

鼻曲鮭が10匹ほど吊るされて寒干しされていた。村内のもう一つの「道の駅」の店先である。目の前には、国道106号線。この道はかつて南部牛が宮古から塩を運んだ「塩の道」である。塩の道は海産物、薪炭、木材も運んだ。北上山系開発の時代は、沢山の役人と土木業者が行きかったことだろう。今後は、森の恵みを学ぶ子どもたちの道になるのだろうか。

後記：この原稿は、11月20日、21日に行なわれた日本林政ジャーナリストの会（会長：上松寛茂）主催の共同取材をもとに作成しました。参加者は、赤堀楠雄、上松寛茂、城戸壇、小澤 真虎人、清水 俊雄、水口 哲、山縣 睦子（50音順）です。

森を滅ぼした人々の島——ラバ・ヌイ訪問記

滑志田 隆

毎日新聞社人口問題調査会

ペルーのカヤオ港を出てから7泊8日、私たちの客船は太平洋の大波に揺られ続けた。生きものといえば、海面から跳ねるトビウオとイルカ、そして上空を飛行するカツオドリしか見ることがなかった。私たちが漸くたどりついたラバ・ヌイ (Rapa Nui) は、まさに大海原の中に孤立した島だった。

フェンダーボートで上陸しようとする私たちの目前に海亀が群れている。巨大な人型の石像が海に背を向けて、あちこちに立っている。そして何よりも私たちに驚かせたのは、約30平方kmのこの島にまとまった木々

の緑が見られないことだった。草原と岩山だけが、凹凸に満ちたこの島の景観を形づくっていた。半ば野生化して引き締まった体の馬たちが、石像物の間を縫うように駆け回っている。接岸した私たちは石垣にへばりつくようにして登り、奇妙な生態系の中へ一歩を踏み出した。

人間の不可解な営み

太平洋は地球の表面積の約3分の1を占めている。その中央部と西南部にあたるオセアニアの大半部は「多

数の島」という意味でポリネシアと呼び習わされる。東西に約6000^キ、南北に約8000^キ。身体の形態や文化が似通った人々が住む、この茫漠たる地域の東端に浮かんでいる絶海の孤島。その火山島がイースター島である。

イースターとはキリスト教徒の復活祭を意味する呼称であり、謎を秘めた太平洋上の孤島には全くふさわしくない名前だ。そのいわれは、1722年にチリ海岸から500海里の海域で、この島を最初に見つけたと報告したのがオランダの軍艦であったためだ。その日は4月6日で、彼らキリスト教徒にとってこの上なくめでたい復活祭の日にあっていた。

このオランダ軍艦に同乗したカール・ベレンスという男が16年後に発表した旅行記によれば、この島にたどりついた最初の舟は「アフリカ人の奴隷に漕がせたガレー船」だったという。島の住人の外見についてベレンスは次のように書いた。「彼らの耳は肩まで垂れ下がるほど非常に長く、幾人かは装飾として耳に白色の球をつけていた。ここの人々は見たところ、武器をもっていなかった」。

島の人々は自分たちの住む島を「ラパ・ヌイ」（大きな島、あるいは臍の意味）と呼び、世界が海に没した後に取り残された唯一の人間の居住空間であると信じていたという。かれらはロンゴ・ロンゴという独特の文字を使っていた。この文字は今日にいたっても未解読であり、それはこの島の住人がほぼ死に絶えてしまい、それ以前に全ての文字板が宣教師によって破壊され、伝承が不可能になったからである。それは西洋との出会いによってこの島がいかにも過酷な歴史を歩まざるを得なかったのかを象徴する出来事でもある。

話を島の命名者となったオランダ軍艦に戻すと、当時の航海日誌が残っているという。現代のロシア人地理学者、コンドラトフが紹介する同日誌の内容によれば、オランダ人たちを驚愕させたのは「高さと幅が少なくとも30フィートもある石の巨像」であり、「堅牢な木がぜんぜんなく、また丈夫な綱もっていない人々が、いかにして立てたのかどうしても納得できなかった」と記述している。

この驚きと不可解は、その後に島を訪れる全ての人々が共にいただくことになる。それはいかにも古典的で新鮮な感慨である。2008年12月8日に上陸した私たちも、しばし石の巨像の前でふさぎこむようにして、この感

慨にひたり、人間の営みと環境へのかかわりについてあれこれと思い巡らせることになった。

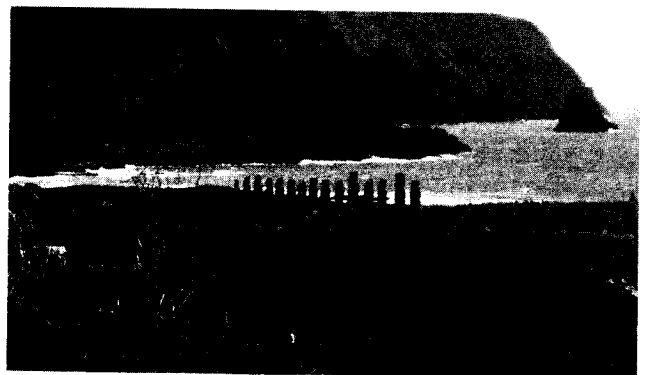
森が消え、そして人が絶えた…

石像はモアイと呼ばれ、島の各所に百数十体が立っている。完成品はアフと呼ばれる台座に乗っている。未完成のまま放置されたり、地下に埋もれているものあり、岩山にはモアイ工房らしき遺構もあり、それらを訪ね歩く私たちは不可解を通り越して、もはや滅びた文明の亡霊に取り付かれたような朦朧とした気分のままに草原をさまようことになる。

多くの考古学者がモアイ像の研究に挑み、それが葬送や先祖崇拝の儀礼に関係する遺物であることを推定している。ある者は島の文明の高さを誇示して敵を威嚇するものと指摘するが、敵は海から来るはずなのに、多くのモアイたちが海に背を向けて立っている理由についての明確な説明はない。

研究者の花粉分析によれば、この島元来の植物の種類は多く、また地表は樹木に覆われていたことが確実視されるという。少なくとも4世紀には人が住んでおり、10世紀ごろからモアイの製作がさかんに行われた。当時の推定人口は1万5千人から2万人。農耕やカヌーの製造、モアイ像の製作のために多くの木々が伐採され、森は植林・造成されることがなかったという。16世紀から17世紀にかけて部族間の紛争が起これ、多くのモアイ像が破壊されたらしい。

そして、西洋キリスト教徒との出会いが島の文明と信仰を根こそぎに消滅させることになる。オランダ人のあとにはスペイン人が、また有名なクック船長のフリゲート艦もこの島を訪れる。18世紀から19世紀にかけて住民らの多くは奴隷としてペルーに連れ去られ、残った人々にヨーロッパから持ち込まれた天然痘が襲いかかる。チリの領土として国際登録された1888年の



直前の人口はわずかに111人だった。

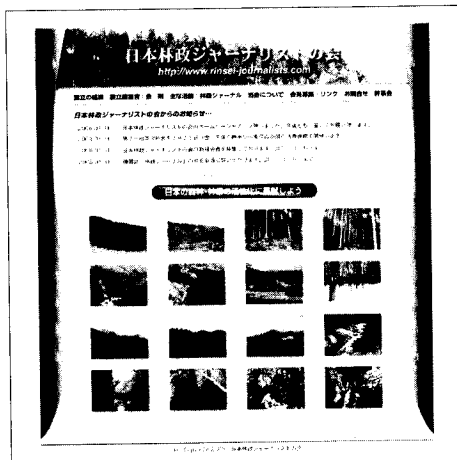
岩山のとっぺんで文明を考えた

私は少年のころに、パルザの木から作った9本の丸太組みの筏で太平洋を渡ったノルウェーの考古学者、ハイエルダールの探検物語に強くあこがれた。彼はイースター島への最初の渡来人がアンデス文明の担い手であったという仮説を実証しようとして海に出た。もちろん彼のコン・チキ（太陽神）号の冒険成功は、ポリネシアの最初の人植者が南米起源であることの裏づけにはならなかった。しかし、古代の丸太筏が4300海里を航行することを実証し、文明の謎は体を使

って証明するものだと私たちに教えている。

以来、私はイースター島に行かざるを得ないと思っていた。今回、家内にもつき合わせて上陸し、島を歩き、岩山の頂上に登って考えたことは、森を減ぼした人々が文明の破壊にいたる運命についてである。このことの意味を問い返しながら、もう一度日本の森林をながめ渡してみたいと考えている。最近、このような文明的な視点から行政のパラダイム転換の意義を考える『地球温暖化問題と森林行政の転換』（論創社、3800円）という本を出版した。ご興味のある方に、ぜひ読んでいただき、批判してほしいと思う。よろしく。

当会ホームページ、ついに開設 <http://www.rinsei-journalists.com>



昨年準備が進められてきた日本林政ジャーナリストの会のホームページが、2008年1月末に開設されました。さまざまな森林の写真で飾られたトップページに続き、「よびかけ—日本の森林・林業の活性化に貢献しよう—」、「設立の経緯」、「設立趣意書」、「会則」、「主な活動」、「林政ジャーナル(電子版)」、「当会について(組織、連絡先)」、「会員募集」、「リンク」、「問い合わせ」などの項目に分かれた内容になっています。

一般に向けた情報発信とともに、会員間コミュニケーションの円滑化にも有効に役立てていきたいと考えています。今後、会員掲示板、幹事会専用ページなども付け加え、さらなる充実を図ってまいります。ぜひ一度開いてご覧ください。

(藤井礼子)

編集後記

日本のスギの木が、はるかかなた、大西洋上の島で活躍しているという高田さんと福井さんの報告は興味深かった。

個人的な体験では、ニュージーランドと韓国の済州島で日本のスギを見たことがある。経済林というより防風林としての使われ方だった。異国の地での日本の木との出会いは感慨深いものがあるが、離島の移入種問題が頭をよぎる。スギ自体は、その土地の在来種を押しつけてまで繁茂する木ではないけれど、慎重さは必要だと思う。

お隣の中国にもスギがあると聞いた。柳杉と呼ばれるらしい。遠い昔、日本から移入されたものではない

かという説に従えば、長い年月のあいだに大陸の風土に適応した品（変）種に変異していったようだ。沖縄の森でもスギを見た。400年くらい前に本土から持ち込まれたのが始まりだという。亜熱帯に近い森でも海外の森でも、それなりに適応して育っているスギ。その性質の、したたかな一面を垣間見た気がする。かつて、寒冷な時代を若狭湾や屋久島などで生き延びてきたとされるスギの底力が、今も生きているかのようだ。

海を越えてスギががんばっている。高田さんと福井さんの報告は、日本での利用、もっとがんばれというメッセージと受け取った。

(海老沢)